

雪靈記事

泉鏡花

青空文庫

「このくらいな事が……何の……小児のうち歌留多を取りに行つたと思えば——」

越前の府、武生の、佐しい旅宿の、雪に埋れた軒を離れて、二町ばかりも進んだ時、

吹雪に行悩みながら、私は——そう思いました。

思いつつ推切つて行くのであります。

私はここから四十里余り隔たつた、おなじ雪深い国に生れたので、こうした夜道を、十町や十五町歩行くのは何でもないと思つたのであります。

が、その凄じさといつたら、まるで真白な、冷い、粉の大波を泳ぐようで、風は荒海に齊しく、ごうごうと呻つて、地——と云つても五六尺積つた雪を、押し揺つて狂うのです。

「あの時分は、脇の下に羽でも生えていたんだらう。きつとそうに違いない。身軽に雪の上へ乗つて飛べるように。」

……でなくつては、と呼吸も吐けない中で思いました。

九歳十歳ばかりのその小児は、雪下駄、竹草履、それは雪の凍てた時、こんな晩には、柄にもない高足駄さえ穿いていたのに、転びもしないで、しかも遊びに更けた正月の夜の十二時過ぎなど、近所の友だちにも別れると、ただ一人で、白い社の広い境内も抜けられ、邸町の白い長い土塀も通る。……ザザツ、ごうと鳴って、川波、山嵐とともに吹いて来ると、ぐるぐると廻る車輪のごとき濃く黒ずんだ雪の渦に、くるくると舞いながら、ふわふわと済まアして内へ帰った——夢ではない。が、あれは雪に靈があつて、小児を可愛がつて、連れて帰つたのであるかも知れない。

「ああ、酷いぞ。」

ハツと呼吸を引く。目口に吹込む粉雪に、ぼつと背を向けて、そのたびに、風と反対の方へ真俯向けになつて防ぐのであります。こういう時は、その粉雪を、地ぐるみ煽立てますので、下からも吹上げ、左右からも吹捲くつて、よく言うことですからけれども、面の向けようがないのです。

小児の足駄を思い出した頃は、実はもう穿ものなんぞ、疾の以前になかつたのです。

しかし、御安心下さい。——雪の中を跣足で歩行く事は、都会の坊ちゃんや嬢さんが吃驚なさるような、冷いものでないだけは取柄です。ズボリと踏込んだ一息の間は、冷さ

骨髓に徹するのですが、勢よく歩行しているうちには温くなります、ほかほかするくらいです。

やがて、六七町潜つて出ました。

まだこの間は気丈夫でありました。町の中ですから両側に家が続きしております。この辺は水の綺麗な処で、軒下の両側を、清い波を打った小川が流れています。もつともそれなれんぞ見えるような容易い積り方じやありません。

御存じの方は、武生と言えば、ああ、水のきれいな処かと言われます——この水が鐘を鍛えるのに適するそうで、釜、鍋、庖丁、一切の名産——その昔は、聞えた刀鍛冶も住みました。今も鍛冶屋が軒を並べて、その中に、柳とともに目立つのは旅館であります。

が、もう目貫の町は過ぎた、次第に場末、町端れの——と言うとすぐに大な山、峻い坂になります——あたりで。……この町を離れて、鎮守の宮を抜けますと、いま行こうとする、志す処へ着く筈なのです。

それは、——そこは——自分の口から申兼ねる次第でありますけれども、私の大恩人——いいえいえ恩人で、そして、夢にも忘れられない美しい人の侘住居なのであります。

侘住居と申します——以前は、北国においても、旅館の設備においては、第一と世に

知られたこの武生の中うちでも、その随一の旅館の娘で、二十六の年に、その頃の近国の知事おもいものの妾めかけになりました……妾めかけとこそ言え、情なさけぶか深く、優やさしいのを、昔いにしえの国主の貴婦人、簾れんちゆ中うちのように称たたえられたのが名にしおう中の河内かわちの山裾やますそなる虎杖いたどりの里に、寂やまがしく山家やまが住居ずまいをしているのですから。この大雪の中に。

二

流るる水とともに、武生は女のうつくしい処だと、昔から人が言うのであります。就なかん中ずく、蔦屋つたや——その旅館の——お米よねさん（恩人の名です）と言え、国々評判なのであります。

まだ汽車の通じない時分の事。……

「昨夜はどちらでお泊り。」

「武生でございます。」

「蔦屋きれいですな、綺麗きれいな娘さんが居ます。勿論、御覧ごらんでしょう。」

旅みちづれは道連みちづれが、立場たてばでも、また並木なみきでも、言ことばを掛合かあう中うちには、きつとこの事がなければ

納まらなかつたほどであつたのです。

往來ゆききに馴なれて、幾度いくたびも蔦屋の客となつて、心得顔をしたものは、お米さんの事を渾名あだなして、むつの花、むつの花、と言いました。——色と言ひ、また雪の越路こしじの雪ほどに、世に知られたと申す意味ではないので——これは後言くりごとであつたのです。……不具かたわだと言うのです。六本指、手の小指が左に二つあると、見て来たような噂うわさをしました。なぜか、——地方いなかは分けて結婚期が早いのに——二十六七まで縁に着かないでいたからです。

(しかし、……やがて知事おともいものの妾めかけになつた事は前にちよつと申しました。)

私はよく知つています——六本指なぞと、氣けもない事です。確たしかに見ました。しかもその雪なす指は、摩耶夫人まやぶにんが召す白い細い花の手袋のように、正に五弁で、それが九死一生だつた私の額こつに密そつと乗り、軽く胸むねに掛かつたのを、運命の星かぞを算かぞえるごとく熟じつと視みたのでありますから。——

またその手で、硝子杯コップの白雪しらゆきに、鶏卵たまごの蛋黄きみを溶かしたのを、甘露せとせを灌そそぐように飲のみませました。

ために私は蘇よみがえ返かえりました。

「冷水おひやを下ください。」

もう、それが末期だと思つて、水を飲んだ時だったのです。

脚気を煩つて、衝心をしかけていたのです。そのために東京から故郷に帰る途中だったのでありますが、汚れくさつた白緋を一枚きて、頭陀袋のような革靴一つ掛けたのを、玄関さきで断られる処を、泊めてくれたのも、螢と紫陽花が見透しの背戸に涼んでいた、そのお米さんの振向いた瞳の情だったのです。

水と言えば、せいぜい米の磨汁でもくれそうな処を、白雪に蛋黄の情——萌黄の蚊帳、紅の麻、……蚊の酷い処ですが、お米さんの出入りには、はらはらと螢が添つて、手を映し、指環を映し、胸の乳房を透して、浴衣の染の秋草は、女郎花を黄に、萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。

「まあ、汗びつしより。」

と汚い病苦の冷汗に……そよそよと風を恵まれた、浅葱色の水団扇に、幽に月が映しました。……

大恩と申すはこれなのです。——

おなじ年、冬のはじめ、霜に緋葉の散る道を、爽に故郷から引返して、再び上京したのでありますが、福井までには及びません、私の故郷からはそれから七里さきの、丸岡の

建場に俾たてが休くるんだ時立合せた上下の旅客の口々から、もうお米さんの風説うわさを聞きました。

知事おもいものの妾おともとなつて、家を出たのは、その秋だったのであります。

ここはお察しを願います。——心易くは礼手紙、ただ音信おとずれさえ出来ませぬ。

十六七年を過ぎました。——唯ただいま今の鯖江さばえ、鯖波さばなみ、今庄いまじょうの駅が、例の音に聞えた、

中の河内、木の芽峠、湯の尾峠を、前後左右に、高く深く貫くのであります、汽車は雲の上はしを馳はります。

間の宿あいしゆくで、世事の用はいささかもなかつたのでありますが、可なつかしき懐なつかしきの余り、途中で武生へ立寄りました。

内証さつきで……何となく顔を見られますようで、ですから内証で、その蔦屋へ参りました。臯月上旬さつきでありました。

三

門かど、背戸うしろの清ながれき流、軒ふたもとに高やなぎき二本柳、——その青柳あおやぎの葉しげりの繁茂——ここにイミ、あの背戸うしろに団扇うちわを持ひつた、その姿が思われませぬ。それは昔のままだったが、棟ひとむね、西洋

館が別に立ち、帳場も卓子テエブルを置いた受附になって、蔦屋の様子はかわっていました。

代替りになったのです。——

少しばかり、女中に心づけも出来ましたので、それとなく、お米さんの消息を聞きますと、蔦屋も蔦竜館ちようりゆうかんとなった発展で、持もちのこの女中などは、京の津から来ているのだそうで、少しも恩人の事を知りません。

番頭を呼んでもらって訊ねますと、——勿論その頃の男ではなかったが——これはよく知っていました。

蔦屋は、若主人——お米さんの兄——が相場にかかって退転をしたそうです。お米さんにまけない美人をと言つて、若主人は、祇園ぎおんの芸妓げいしやをひかして女房にしていたそうです。りますが、それも亡くなりました。

知事——その三年前ぜんに亡くなった事は、私も新聞で知っていたのです——そのいくらか手当が残ったのだらうと思われます。当時は町を離れた虎杖いたどりの里に、兄妹がくらし、若主人の方は、町中のある会社へ勤めていると、この由、番頭が話してくれました。一昨年の事なのです。

——いま私は、可おそろし恐い吹雪の中を、そこへ志しているのであります——

が、さて、一昨年のその時は、翌日、半日、いや、午後三時頃まで、用もないのに、女中たちの蔭で怪む氣勢あやしけはいのするのが思い取られるまで、腕組が、肘ひじまくら枕まくらで、やがて夜具を引被ひつかぶつてまで且つ思い、且つ悩み、幾度か逡巡しゆんじゆんした最後に、旅館をふらふらとなつて、とうとう恩人を訪ねに出来ました。

わざと途中、余所よそで聞いて、虎杖村に憧憬あこがれ行く。……

道は鎮守がめあてでした。

白い、静しずかな、曇つた日に、山吹も色が浅い、小流こながれに、苔蒸こけむした石の橋が架かつて、その奥に大きくはありませんが深く神寂かんさびた社やしうがあつて、大木の杉がすらすらと杉なりに並んでいます。入口の石の鳥居の左に、とりわけ暗く聳そびえた杉の下もとに、形はつい通りでありませんが、雪難之碑と刻んだ、一基の石碑が見えました。

雪の難——荷担にかつきふ夫、郵便配達の人たち、その昔は数多あまたの旅客も——これからさしかかつて越えようとする峠路とうげみちで、しばしば命を殞おとしたのでありますから、いづれその霊を祭つたのであろう、と大空の雲、重かさなる山、続いたく巔たきそび、聳そびゆる峰を見るにつけて、凄すさまじき大濤おほなみの雪の風情を思いながら、旅の心も身に沁しみて通過ぎました。

瞰なわてみち道少しばかり、菜種の畦あぜを入つた処に、志す庵いおりが見えました。侘わびしい一軒家の平

屋ですが、門のかかりに何となく、むかしの状を偲ばせませ、萱葺の屋根ではありません。

伸上る背戸に、柳が霞んで、ここにも細流に山吹の影の映るのが、絵に描いた螢の光を幻に見るようでありました。

夢にばかり、現にばかり、十幾年。

不思議にここで逢いました——面影は、黒髪に笄して、雪の襦袢した貴夫人のように遙に思ったのとは全然違いました。黒縹子の襟のかかった縞の小袖に、ちつとすき切れのあるばかり、空色の絹のおなじ襟のかかった筒袖を、帯も見えないくらい引合せて、細りと着ていました。

その姿で手をつきました。ああ、うつくしい白い指、結立ての品のいい円鬘の、情らしい柔順な髻の耳朶かけて、雪なす項が優しく清らかに俯向いたのです。生意気に杖を持って立っているのが、目くるめくばかりに思われました。

「私は……関……」

と名を申して、

「鳶屋さんのお嬢さんに、お目にかかりたくて参りました。」

「米は私でございます。」

と顔を上げて、清しい目で熟と視ました。

私の額は汗ばんだ。——あのいつか額に置かれた、手の影ばかり白く映る。

「まあ、関さん。——おとなにおなりなさいました……」

これですもの、可懐きはどんなでしょう。

しかし、ここで私は初恋、片おもい、恋の愚痴を言うものではありません。

……この凄^{すじ}い吹雪の夜^よ、不思議な事に出あいました、そのお話をするのであります。

四

その時は、四畳半ではありません。が、炉を切った茶の室に通されました。

時に、先客が一人ありまして炉の右に居ました。気高いばかり品のいい年とった尼さんです。失礼ながら、この先客は邪魔でした。それがために、いとど拙い口の、千の一つも、何にも、ものが言われなかつたのであります。

「貴女は煙草をあがりますか。」

私はお米さんが、その筒袖こいぐちの優しい手で、煙管きせるを持つのを視みてそう言いました。
お米さんは、控うづむえてちよつと俯向うつむきました。

「何事もわすれ草と申しますな。」

と尼さんが、能の面がものを言うように言いました。

「関さんは、今年三十五におなりですか。」

とお米さんが先へ数えて、私の年を訊たずねました。

「三三碧さんぺきのう。」

と尼さんが言いました。

「貴女は？」

「私は一つ上……」

「四緑しりよくのう。」

と尼さんがまた言いました。

——略して申すのですが、そこへ案内もなく、ずかずかと入つて来て、立状たちざまにちよつと私を尻目にかけて、炬の左の座についた一人にんがあります——山伏か、隠者か、と思う風ふう采うさいで、ものの鷹揚おうような、悪く言えば傲慢ごうまんな、下手が画えに描いた、奥州めぐりの水戸の

黄門といった、鼻の隆い、髯の白い、早や七十ばかりの老人でした。

「これは関さんか。」

と、いきなり言います。私は吃驚しました。

お米さんが、しなよく頷きますと、

「左様か。」

と言つて、これから滔々と弁じ出した。その弁ずるのが都会における私ども、なかま、なかまと申して私などは、もの数でもないのですが、立派な、画の画伯方の名を呼んで、片端から、奴がと苦り、あれめ、と蔑み、小僧、と呵々と笑います。

私は五六尺飛退つて叩頭をしました。

「汽車の時間がございますから。」

お米さんが、送つて出ました。花菜の中を半の時、私は香に咽んで、涙ぐんだ声して、

「お寂しくおいでなさいましょう。」

と精一杯に言つたのです。

「いいえ、兄が一緒ですから……でも大雪の夜なぞは、町から道が絶えますと、ここに私一人きりで、五日も六日も暮しますよ。」

とほろりとしました。

「そのかわり夏は涼しゅうございます。避暑にいらつしやい……お宿をしますよ。……その時分には、降るように蛍が飛んで、この水には菖蒲あやめが咲きます。」

夜汽車の火の粉が、木の芽峠を蛍に飛んで、窓にはその菖蒲が咲いたのです——夢のようです。……あの老尼は、お米さんの守護神まもりがみ——はてな、老人は、——知事の怨靈おんりょうではなかつたか。

そんな事まで思いました。

円鬚まるまげに結つて、筒袖こいぐちを着た人を、しかし、その二人はかえつて、お米さんを秘密の霞に包みました。

三十路みそじを越えても、窈やつれても、今もその美しさ。片田舎の虎杖になぞ世にある人とは思われません。

ために、音信おとずれを怠りました。夢に所がきをするようですから。……とは言え、一つは、日に増し、不思議に色の濃くなる炉の右左の人を憚はばかつたのであります。

音信して、恩人に礼をいたすのに仔細しさいはない筈はず。けれども、下世話にさえ言います。慈

悲すれば、何とかする。……で、恩人という、その恩に乘じ、情なさけに附入つるような、賤いやしい、浅ましい、卑劣な、下司げすな、無礼な思いが、どうしても心を離れないものですから、ひとり、自ら憚おそられたのであります。

私は今、そこへ——

五

「ああ、あすこが鎮守だ——」

吹雪の中の、雪道に、白く続いたその宮を、さながら峰に築いたように、高く朦朧もつろうと仰あぎました。

「さあ、一息。」

が、その息が吐つけません。

真俯まうつむ向けに行く重い風の中を、背後うしろからスツと軽く襲おつて、裾すそ、頭かしらをどツと可恐おそろいものが引包まむと思うと、ハツとひき息になる時、さつと抜けて、目の前へ真白まっしろな大輪おおきの輪わがあらわ見みえます。とくるくると廻まるのです。廻りながら輪を巻いて、巻き巻き巻込めると見

ると、たちまち凄じい渦になつて、ひゆうと鳴りながら、舞上つて飛んで行く。……行く
と否や、続いて背後から巻いて来ます。それが次第に激しくなつて、六ツ四ツ数えて七ツ
八ツ、身体からだの前後に列を作つて、巻いては飛び、巻いては飛びます。巖いわにも山にも砕けな
いで、皆北海の荒波の上へ馳はしるのです。——もうこの渦がこんなに捲まくようになりまして
は堪えられません。この渦の湧立わきたつ処は、その跡が穴になつて、そこから雪の柱、雪の人、
雪女、雪坊主、怪しい形がぼつと立ちます。立つて倒れるのが、そのまま雪の丘のよう
なる……それが、右になり、左になり、横に積り、縦に敷きます。その行く処、飛ぶ処へ、
人のからだを持つて行つて、仰向あおもむけにも、俯向うつむかせにもたたきつけるのです。

——雪難之碑。——峰とがの尖つたような、その大木の杉こすえの梢を、睫毛まつげにのせて倒れまし
た。私は雪に埋れて行く……身動きも出来ません。くいしばつても、閉じても、目口に浸し
む粉雪こゆきを、しかし紫陽花あじさいの青い花片はなびらを吸うように思いました。

——「菖蒲あやめが咲きます。」——
蛍あやめが飛ぶ。

私はお米さんの、清く暖あたたかき膚を思いながら、雪にむせんで叫びました。

「魔が妨げる、天狗てんぐの業わざだ——あの、尼さんか、怪しい隠士か。」

大正十（一九二一）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十一巻」岩波書店

1941（昭和16）年9月30日

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪霊記事

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>